

東 晃 (国際基督教大学)

停年で北大を去ると同時に、思いもかけず札幌を離れることになった。次の仕事にすぐ就くことになり余り感慨にふける暇もないのだが、御依頼を受けたこの機会に少し雪氷学会にまつわる思い出を書かせて頂くことにしよう。

北大理学部物理学科の学生として卒業実験指導を中谷先生に受けることになったのは、昭和19年10月、予科が2年半の繰上げになった学部3年目進級のときである。その前年の11月に当時物理学科の教授であった茅誠司先生が東大に移られた関係もあり、この年の中谷教室志望者はクラス全員14名の半数近くの6名であった。しかし丁度低温研ができたばかりであったので、中谷先生は6人を低温研の吉田、福富、井上、花島の諸先生に配分し、私には低温分室(もとの常時低温研究室、今人工雪誕生の地の碑の建っているところにあった)に陣取っていた菅谷重二さんのところに行って、凍上の実験の手伝いをするよう命ぜられた。

凍上がどんなことかは、中谷先生の書かれた随筆などで知っていたので、すでに菅谷さんが低温室前室の奥を仕切って作った大型凍上実験装置の毎日のお守りをする仕事にすぐ取りかかった。深さ1mもある深い土のサンプルが底まで凍ったとき、その重たい箱を取出して含水量測定試料を切出すのだが、今のように電動の鋸などない時代だから、歯が丸く減った手鋸で力まかせに硬い凍土をシコシコ切っていると、超人的馬力の持主である菅谷さんから「何だ、軟弱な!」と叱たの声が飛んでくるのであった。そんなある日、菅谷さんが「黒田のオバケが来て凍上の話をするそうだから聞きにゆこう」と言われ、一緒に鉄道集会所の会場に出かけた。黒田のオバケとは後に日本雪氷学会々長になった、当時理研の黒田正夫博士である。正確にはどうだったのか判らないが、この講演会は雪氷学会の前身、日本雪氷協会北海道支部の催しであったようだ。というわけは、そこで私は初めて雪氷協会の存在を知ったような気がするからである。

勿論、この会には中谷先生や吉田先生なども来ておられた。黒田さんは「理研で昔中谷君と一緒にだったが、中谷君は北海道に行って雪の研究をするというから、それじゃ君は地上の雪をやれ、僕は地中の氷をやるから、と言って別れた。今日の話はその後の僕の研究についてだ」という前置きをして、朝鮮の鉄道で黒田さんが指導して行なわれた凍上の話をされた。実は中谷先生もそのときには札幌鉄道局の委嘱を受けて既に数年にわたって凍上の研究調査をしておられ、凍上の原因は地中の霜柱だ、と言っておられたので、凍上は黒田さんの専売特許ではなかった。詳しいことはすっかり忘れてしまったが、黒田さんの話は中谷流の研究とは大分違う印象で、今思うとやはり金属物理屋・工学博士黒田正夫独特のアプローチ・メソッドだったのではなかろうか。しかし、この講演会はふだん接している中谷教室以外の研究者の話が聞けたという意味で、初学者の私には仲々有益だった。菅谷さんは「オバケが他流試合に乗り込んできた」と言ったが、研究者の間の議論がどんな風に交わされるかを初めて知ったのである。雪氷協会・雪氷学会との長いおつき合いの始まりであった。

もっとも私が正式に学会に入会したのは昭和33年らしく、手元にある「雪氷」の一番古いのは同年の第20巻である。その第1号に「IUGG総会に出席して」という私の書いた「随筆」がのっている。ちょうど米国のSIPRE滞在中のその前年の秋にカナダのトロントでIUGGの第11回総会があり、これに出席してICSIの会合で北海道で行なったスノウ・サーベイの研究発表をした

り、日本からの他の論文の代読をした。当時はまだ日本から国際会議に出かけるのはかなり難しい御時勢であり、ICSIの日本人出席者は私一人であった。また私にとっても国際会議出席は初めてであり、会議中は新知識の吸収に努め、それをこの随筆中に報告した次第だった。そしてこの時初めてイギリスのGlen、スイスのde Quervain、カナダのGoldといった人達に会い、以後長く親交を続けている。このときICSIの役員に日本人としては初めて中谷先生が副会長に選ばれたが、その予備折衝にも当たったのであった。

昔の「雪氷」を見ると、何かしら今のより面白かったような気がするの、余りかみしもをつけないで書かれている記事や論文が、それなりに当時の自分の関心にマッチしていた故であろうか。しかし、思い返して見ると「雪氷」にはいつも満足していたわけではない。一頃はその発行がひどく停滞して1年近くも遅れていた。上京の機会に、当時の編集委員の何人かに会いに行き、もう少し何とかならないのかと談じこんだこともある。この頃は学術誌としての体裁も整い発行も順調だが、面白くない、役に立たない、といった批判もあると聞いている。スペクトラムの広い会員の誰もが満足できる雑誌を作ることは至難の業であろうが、各人にとって時々面白く、役に立てばよいのではあるまいか。そういう意味では学会がいろいろの研究面で夫々の進展のための分科会・研究会の場として活用され役立っているし、解説、特集なども時宜を得て面白いものも多い。今後は、多くの学会でやっているように、論文誌と情報・解説などを扱う学会誌を別建てにするなどの工夫も必要かもしれない。いずれにしろ、解説や特集のとりまとめには若いアクティブな会員の活躍を期待したい。

北海道支部のことになるとぎんきに耐えないことが一つある。それは昭和50年度の秋季大会を旭川市で開いたとき、不覚にもその夏のアラスカ氷河調査の際におこった椎間板ヘルニアの手術を受けたため、当時北海道支部長でありながら、この大会に参加できなかったことである。当時の支部役員の皆様には御迷惑をおかけし、いろいろお世話になった。改めて厚くお礼を申し上げたい。

北海道支部はその後56年の札幌の秋季大会を運営し、昨年はIGS-84シンポジウムの実質的運営を担当するまでに成長した。一方IGSシンポジウムを契機として、また学術会議の改組とも関連して、雪氷学会の運営組織の弱点も露になってきた。今後その改革を実行してゆくには、IGS運営の経験を生かし若い会員諸氏が責任をもって学会の運営に参画して頂く必要があろう。思い出話が脱線して若い人々への註文になってしまったが、これも学会、そして北海道支部の発展を願ってのこととしてお許しをいただきたい。